【豊後高田市受託研究】『未来へ光り続ける豊後高田観光戦略』調査

中山昭則　Akinori NAKAYAMA

筆者のもとに標記の受託研究の話が舞い込んできたのは2014(平成26)年５月のことである。その後学内調整を経て７月末に大学（受け皿は「別府大学文化財研究所」）と豊後高田市（担当部署商工観光課）との間で受託研究契約が結ばれた。

本受託研究（以下、本研究）は、豊後高田市における観光戦略策を提示することが目的である。本研究の背景には、全国的に有名となった「昭和の町」が、この数年来訪者数が頭打ち状態となっていることと、今後人口減少が見込まれる中、持続的な観光戦略の構築と、地域資源の掘り起こしが急がれるという状況がある。

本研究は同年８月21日の現地視察から本格化した。この調査には筆者が顧問をしている『旅と地域の研究会（以下、たび研)』の学生たちを補助要員として登用した。学生たちにとっても臨場感あふれる調査・研究の一端に触れることによって、学ぶ意味を理解しスキルアップが期待できる。

８月の現地調査は、先ずは昭和の町および市が観光資源として期待している海岸の現状を知ることを目的とした。豊後高田市は海岸線を「恋叶ルート」として売り込んでいる。このルートは『夕陽百選』に選ばれた真玉海岸から“縁結びの神”として信仰されている粟島神社、そして“花とアート”で売り込んでいる長崎鼻を結ぶ20kmにおよぶルートである。今回はアクセス面と既存施設の観光資源性を中心に視察した。調査としては地図とパンフレットをもとに現況を観察した。現状から課題となる点を挙げるとともに、観光資源として有望な場所・施設の掘り起こしにも務めた。

後期が始まると、各自がまとめた８月の調査報告を持ちより討論した。次いで10月に予定している次の現地調査で行うべき事項について検討した。しかし、その10月の調査は台風の影響で中止を余儀なくされてしまった。

結局２回目の現地調査は11月８日に実施した。この時は長崎鼻の調査に絞った。ここは地元住民がNPO法人（長崎鼻B·Kネット）を組織し、主体的に整備・管理運営している。この組織への聞き取りおよび現状の観察調査を実施した。

長崎鼻周辺は、およそ40年間放置されていたおよそ20haの耕作放棄地を活用している。その土地は現在では菜の花とヒマワリを中心として年中花の鑑賞が出来るように工夫されている。さらに、菜の花とヒマワリの種から搾油しオイルやドレッシング等の商品開発も行っている。

これらの現地調査と並行して、市から提供を

写真１　粟島神社の視察（2014. 8. 21）

写真２　昭和の町の調査（2014. 8. 21）

写真３　聞き取り調査の様子（2014. 11. 8）

写真４　搾油施設の見学（2014. 11. 8）

受けた「昭和の町の来訪者アンケート」のデータ整理と分析も行った。データ整理は分量が多いので、学生たちが空き時間帯を利用しておよそ１か月以上の時間を費やした。

こうした作業を経て12月25日に再び昭和の町を視察した。現在この調査結果も含めこれまでの調査から得られた知見を整理している処である。

今後は文学部長飯沼賢司教授の指導のもとで調査を進めている文学部史学・文化財チームと合同の発表会・検討会を2015年１月15日および22日に予定している。そして学生たちの精力的な調査活動の結果を踏まえ報告書としてまとめていく予定である。